

4.前回の長期構想からの進捗状況

4.前回の長期構想からの進捗状況

1-1) 前回の「社会経済情勢の将来予測」「役割・機能」と、それ以降の情勢変化

【国際物流機能】

前回の長期構想(平成19年3月)		現在	
社会経済情勢の将来予測	役割と機能	世界・日本を取り巻く情勢の変化	苫小牧港を取り巻く情勢の変化
【経済】 ● 東アジアの経済成長 ● 東アジアの経済発展に伴う購買力向上 ● 東アジア経済の地域ブロック化の進展 【産業】 ● 自動車産業の進展 ● 道産農水産品の国際的なブランド化の進展	【国際物流機能】 《役割》発展する東アジア経済圏に北海道を組み込む苫小牧港 《機能》 ● 道内組立型産業と東アジア・北米とのSCMの拠点 ● 北東アジアと北米との中継を担う拠点 ● 東アジアへの農水産品の円滑な供給を支える拠点	● 東アジア⇒東南アジア・南アジアへと成長拠点がシフトしつつある ● 人口減少の進展により、国内・道内の経済規模は年々縮小傾向 ● 「アジア観光客の急増」など、アジア諸国の購買力は著しく向上し、道産農水産品のブランドが浸透 ● 北海道の農業算出額、漁業生産額のシェアが増しており、食料供給基地の役割・ポテンシャルが高まっている ● 国・北海道による「食」の輸出拡大に向けた取組の推進 ● 「国際コンテナ戦略港湾」の政策の推進	● 苫小牧の企業では、縮小する道内・国内市場を補うため、輸出拡大に活路を見出そうとする動き ● 苫東地区において、相次いで植物工場が立地しており、将来的には生産した農産品の輸出が目指されている ● 道内産の原料を活かした生産から加工・販売まで展開する6次産業化を目指す動き ● 国際フィーダーコンテナ船の大型化 ● 農水産品輸出促進基盤整備事業において、輸出拠点港湾及び連携水揚港湾として位置づけ(平成29年5月)

<進捗したもの>

- 東港区への国際コンテナターミナル移転(平成20年8月)
- 国際フィーダー機能を東港区へ移転(平成25年4月)
- 水産物輸出促進に向けた屋根付岸壁の整備(第1期供用式典 平成30年5月)



4.前回の長期構想からの進捗状況

1-2) 前回の「社会経済情勢の将来予測」「役割・機能」と、それ以降の情勢変化

【内貿ユニットロード輸送機能】

前回の長期構想(平成19年3月)		現在	
社会経済情勢の将来予測	役割と機能	世界・日本を取り巻く情勢の変化	苫小牧港を取り巻く情勢の変化
【産業】 ● 自動車産業の進展 ● 必需物資・製品の需要が増加傾向 【食料】 ● 食料に対する国民の安全志向	【内貿ユニットロード輸送機能】 《役割》国内産業・国民生活を支える苫小牧港 《機能》 ● 多種多様な物資・製品を安定・確実に届けるための定時性の確保やリードタイム短縮 ● 北海道の安全で新鮮な食料を早く・確実に消費者へ届ける物流サービス水準の確保・向上	● 冷涼な気候での高い品質が選ばれている乳製品、ネット通販・オークションの拡大に伴う宅配貨物など輸送需要が増加 ● ドライバー不足や労務時間管理の厳格化	● ドライバー不足や労務時間管理の厳格化により、苫小牧港から他港へ遠隔地(道東・道北)の貨物が流れている ● 道東道など高速道路網の延伸、さらに平成32年には、「苫小牧中央IC」の供用が予定されており、物流効率化、利便性向上に期待 ● フェリーについて、近距離航路から中長距離航路へシフトの傾向 ● RORO船舶の大型化

<進捗したもの>

- 西ふ頭・南ふ頭における複合一貫輸送ターミナルの整備(平成23年～現在整備中)



<進捗していないもの>

- 周文ふ頭(-9)220m 1バース。背後用地の一部はシャーシヤードとして整備済み(既存フェリーの大型化等に対応)



4.前回の長期構想からの進捗状況

1-3) 前回の「社会経済情勢の将来予測」「役割・機能」と、それ以降の情勢変化

【バルク輸送機能】

前回の長期構想(平成19年3月)		現在	
社会経済情勢の将来予測	役割と機能	世界・日本を取り巻く情勢の変化	苫小牧港を取り巻く情勢の変化
【産業】 ● 省資源化やリサイクルへの取組の進展 【食料】 ● 厳しい経営状況にある北海道の酪農 【エネルギー】 ● 世界的なエネルギー価格の高騰	【バルク輸送機能】 《役割》北海道の基幹産業を支える苫小牧港 《機能》 ● 飼料や原燃料の輸送コスト低減に向けた船舶の大型化への対応 ● 国際的なリサイクル貨物の円滑な輸送に対応	● 新パナマ運河開通などに伴い船の大型化が予想 ● 「国際バルク戦略港湾」に北海道では釧路港が穀物分野で選定 ● 国内製油所の再編、石炭火力のフル稼働など、エネルギー安定供給が重要性を増す	● バルク船(穀物船)では、船舶の大型化の傾向 ● 釧路港との連携港湾としての役割 ● 北海道の基幹産業(酪農、石油類、石炭火力など)を支える機能はますます重要になっており、飼料や原燃料の輸送コスト低減・安定輸送に向けた対応が求められる

<進捗していないもの>

- 弁天ふ頭(-10)170m 1バース、(-14)280m 1バース、海面処分用地 すべて未着手



4.前回の長期構想からの進捗状況

1-5) 前回の「社会経済情勢の将来予測」「役割・機能」と、それ以降の情勢変化

【自然災害対策等】

前回の長期構想(平成19年3月)		現在	
社会経済情勢の将来予測	役割と機能	世界・日本を取り巻く情勢の変化	苫小牧港を取り巻く情勢の変化
【自然災害】 ● 切迫する自然災害 ● 保安対策等	【自然災害対策等】 《役割》市民生活の安全を確保し、信頼される苫小牧港 《機能》 ● 緊急物資輸送や避難等のための港湾機能の確保 ● 安心して停泊・係留できる環境の確保	● 未曾有の被害が発生した東日本大震災を契機に、災害対策強化、国土強靱化が重要視 ● 南海トラフ巨大地震等への支援、バックアップ機能が注目 ● 津波ハザードマップの作成	● トヨタ自動車は、南海トラフ地震で大規模被災したことを想定し、災害時事業継続計画(BCP)に基づく訓練として、苫小牧港を利用した北米向け自動車の輸出訓練を実施

<進捗したもの>

- 耐震強化岸壁供用開始
(東港区中央ふ頭 平成24年1月、西港区西ふ頭 平成25年9月)
- 「苫小牧港港湾BCP(地震・津波編)」の策定(平成26年度)
- 「苫小牧港港湾BCP(火山編)」の策定(平成28年度)

【西港区西ふ頭】



【東港区中央ふ頭】



4.前回の長期構想からの進捗状況

1-6) 前回の「社会経済情勢の将来予測」「役割・機能」と、それ以降の情勢変化

【環境】

前回の長期構想(平成19年3月)		現在	
社会経済情勢の将来予測	役割と機能	世界・日本を取り巻く情勢の変化	苫小牧港を取り巻く情勢の変化
		● COP21・パリ協定(世界平均気温上昇を2℃未満に抑制)を受け、「地球温暖化対策計画」ではCO2削減目標を2030年度に26%減、2050年度には、80%減と設定 ● 将来の二次エネルギーの中心的役割を担うものとして「水素」が期待 ● 先行的に環境規制が強化されているECA地域に続き、一般海域での排出ガス規制が強化されれば、LNG燃料船の導入がさらに拡大 ● 「北極海航路」は輸送日数、燃料消費量の削減、温室効果ガス排出量の削減に効果が期待	● CCS実証実験が実施、太陽光発電所の集積や木質バイオマス発電所の操業 ● 企業や関係団体等の連携のもと水素を活用した地域づくりの検討を開始 ● 北海道経済同友会が「北極海航路を通じた発展戦略への提言」を発表し、苫小牧港を国が進める北極科学調査船の拠点として提案 ● 北極海航路を利用した船舶が苫小牧港に寄港(H29.6、H29.9、H30.8)

<北極海航路を利用し、苫小牧港に寄港した船舶>

H29.6.26 モジュール船(南ふ頭)



H29.9.21 飼料船(中央南ふ頭)



H30.8.13 飼料船(中央南ふ頭)

